

琉球大学学術リポジトリ

2007-2011

日本・ベトナム共同授業研究会の歩み ～自己の尊
厳・地域の尊厳から、「子ども中心主義」を問い返
す～

メタデータ	言語: 出版者: 村上呂里 公開日: 2012-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 呂里, 西岡, 尚也, 善元, 幸夫, 那須, 泉, Ta Van Thong, Dao Thi Van, Nguyen Thi Nhung, Tran Thi Loan, Murakami, Rori, Nishioka, Naoya, Yoshimoto, Yukio, Nasu, Izumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24032

第 I 部

第1回☆共同授業研究会 in 沖縄

～沖縄古典文学・オモロ歌謡の
群読を試みた授業をめぐって～

(授業) 2007年9月21日・(授業研究会) 23日

◇単元構想と学習指導案

および授業の実際

◇授業研究会の記録

単元 「あけもどろの花」

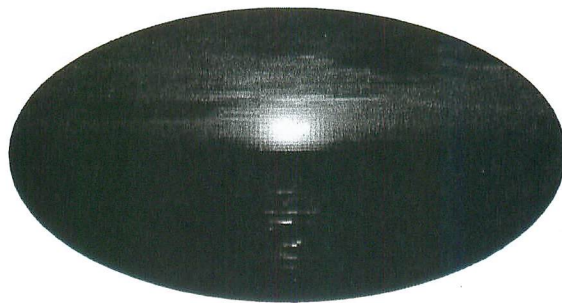
～小学生による沖縄古典文学・オモロ歌謡の群読の試み～

ベトナム人の先生方に、沖縄の小学校で行った沖縄古典文学・オモロ歌謡の群読の授業を見て頂いた。以下は、単元の構想、学習指導案、授業の実際の記録およびベトナム人との共同授業研究会の記録である。

はじめに

急速なグローバル化に伴う地域共同体のゆらぎを背景に、「ことば」が薄っぺらで均質になることへの^{おそ}恐れが「古典」や「伝統」への渴望として現れている。その恐れは、名辞以前（ことばが現れる前の世界）の混沌に佇み、「ことば」によって世界がその^{いのち}〈生命〉（表象）をあらわす^{とき}瞬間に身を置き、「ことばの力」の不思議を認識することへの切なる志向としても現れる。沖縄の地域文学には、人に備わった「ことばの力」の不思議へと感覚をひらかせる古典が存在する。

2006年3月、沖縄県は毎年9月18日を「しまくとぅばの日」とする条例を公布した（沖縄県条例第38号）。この条例において、「しまくとぅば」は「本県文化の基層であり」、「次世代へ継承していくことが重要である」と記されている。「基層」（土壌）から十分な栄養を得ることによってこそ「ことば」の幹は太くなり、共通語という水分を吸収しながらきめこまやかなことばの枝葉を伸ばし、豊かな表現の実を結びゆくだろう。子どもたちの“自前”のことばを活かしつつ、地域で育まれてきた^{いにしえ}古の豊かな「ことばの力」にふれさせ自らのことばをより豊かなものとしていく主体（白石寿文の述べる「自律的言語文化生者」注（1））を育てていきたい。



このような思いのもと、自然の壮大な神秘と向きあい「ことば」が生まれでる瞬間の普遍的な力を感じさせる歌謡「あけもどろの花」（沖縄古典文学『おもろさうし』より）を教材とし、単元を開発した。うるま市立伊波小学校の知念春美校長（当時）および松田政美研究主任、蔵根美智子指導主事（現沖縄市立越来小学校校長）のご助言ご支援を受けながら、担任・成底真知子教諭、琉球大学古典文学担当・萩野敦子と村上が共同で開発したものである。

1、単元「あけもどろの花」の構想

『おもろさうし』は、十三世紀から十七世紀にかけて謡われた歌謡が収められ、「沖縄の原典」と評される。「祈りから抒情へという文学の史的発展の姿を内包している」（外間守善）注（2）古典として位置づけられている。

「おもろ」の語源については、「思ひ（思い）」の意が通説とされ、「思い」を外界に向かって唱えたものとして解される。「おもろ」を読み味わうことによって、沖縄の古の人びとの世界観・自然観・願いなどにふれることができ、日頃、自然の神秘を意識することがないまま生きている現代の私たちの世界観・自然観をも揺るがされる。この「おもろ」歌謡の中でも最も有名な日の出を表現した「あけもどろの花」（『おもろさうし』巻七、三九）を教材とし、日の出を共に体験するとともに、その神秘を古の人びとがいかに表現したかを味わい、「とよむ」や「あけもどろ」など沖縄固有の古のことばの豊かさにふれさせたい。

教材をあげる。

天にとよむ大主

あけもどろの花の

咲いわたり

あれよ 見れよ

きよらやよ

地天とよむ大主

あけもどろの花の

咲いわたり

あれよ 見れよ

きよらやよ

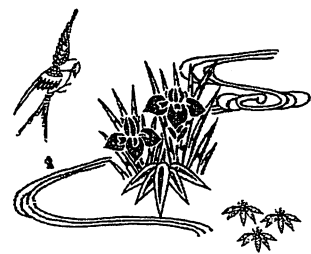
（「あけもどろの花」とは、本単元で子どもたちにわかりやすいように名づけた題名である。）
（「-」と「又」という記号を開いた形で示している。）

まず「とよむ」ということばに注目したい。この語彙は、万葉集（「山下とよみ行く水の」）、古事記（「雉はとよむ」）などにも見られ、大和言葉における古語でもある。古は、鳥や獣の声や、波や地震の鳴動など自然現象を表す際に用いられたが、濁音化（「どよむ」）してからは、主として人の声の騒がしく鳴り響くのに用いられるようになった。益田勝実氏は「あけもどろの花」における「とよむ」を「光と音のカオス」と解釈し、西郷信綱氏は万葉に比べて「比喩的」な用法としている。注（3） 筆者は、単に聴覚がとらえた「音」の響きというより、古の人びとの繊細な身体的感受性がとらえた響きそのものととらえたい。天地を揺るがす底鳴りの荘厳な響きを、古の人びとはたしかに自らの身体と心に響かせ、このように表現したと想像される。授業においては、子どもたちが具体的に「とよむ」を理解し、イメージしやすいように「日の出とともに聞こえてくる音楽や音の響きってどんな感じかな？」と問いかけ、「音」の具体的表現を通して子どもたちの内に、「とよむ」に内包された身体感覚を湧きおこさせたい。

こうした荘厳な響きを背景に、「あけもどろの花 咲いわり」という比喩による視覚的なイメージが鮮やかに映しだされる。「あけもどろ」は沖縄固有の表現。「あけ」は「明け、あるいは赤、転じて美しいの意、『もどろ』は眼がちらつき形象がまだらではつきしない状態をいう。『もどろ』は『まだら』に通ずる」（『沖縄古語大辞典』角川書店、1995年）と説明されている。「地天」を荘厳に鳴響ませながら登場する光の渦が「花」と名づけられ、「咲いわり」と表現され、表象世界にくっきりとその〈生命〉を表す。そこから始めて「あれよ、見れよ」という感嘆・呼びかけの声が発せられている。

自然の神秘の全身的感受からイメージ（表象）へ、そして声へ、という跡を、この歌にとらえることができる。身体に備わった原初的な感覚をひらき、人智を超えて存在する外界との出会いに身を晒し、あらためてその〈生命〉を人間の意識世界にまざまざと現出させる「ことばの力」を体験させる教材としての価値を持つといえるだろう。

「おもろ」は、もともと朗唱される歌謡であった。この特徴を活かし、群読という形で現代によみがえらせたい。群読という方法論を用いることによって、学習者に沖縄古典文の豊かさを身体全体で味わわせ、親しませることができるだろう。



学習指導案

1. 単元のねらい

- (1) 自然（日の出）の神秘を感受し、ことばで表現する。
- (2) 沖縄の古の人びとが日の出の神秘をどのように感受し、表現したか、「あけもどろの花」を読み、沖縄の古語の美しさ・豊かさを味わう。
- (3) 「あけもどろの花」を世界を群読という方法によって創造的に表現する。
- (4) 沖縄古典文学の豊かさにふれ、今後とも親しむ姿勢を育む。

2. 事前学習および準備

- (1) 日の出を実際に見て感じたことを、ことばで表現してくる。
- (2) 子どもたちの作品および日の出の瞬間の写真を、教室に貼っておく。あらかじめ鑑賞しておくよう伝える。
- (3) ことば遊びうたなどを用いて、群読の楽しさを体験しておく。

3. 学習の展開例

第1時

	学習活動	教師の支援	☆評価の観点 *留意事項
導入	(1)教室に貼ってある作品を鑑賞し、その表現の工夫を共有し合う。(比喻、呼びかけ、語彙の選び方など)	○あらかじめ、子どもたちの作品をよく味わい、その良さを引きだすよう、話し合いに参加する。	☆日の出を思いだしながら、その表現の工夫を互いに味わっているか。
展開	「では、沖縄のむかしの人は、日の出をどのように表現しただろう？」		

	学習活動	教師の支援	☆評価の観点 *留意事項
展 開	(2)「あけもどろの花」のワークシートの空欄にどんなことばが入るか想像しながら、黒板を見て写す。	○「あけもどろの花」を貼る（模造紙にあらかじめ書いておく。重要なことばについては空欄にしておく）。空欄に入ることばについて想像力を喚起させながら、空欄に書き込む。	*単元名を黒板の右端に貼る。 *新鮮な気持ちで、「あけもどろの花」の表現にふれることができるようにする。 *ワークシートは、補助教員が配る。ワークシートにみな正しく書き込めているか、補助教員は確認していく。
	(3)みなで、「あけもどろの花」を通して読み（音読）、わからないことばを出し合う。		
	(4)「とよむ」「大主」「あけもどろ」「咲いわり」「きよら」などのことばについて、意味の説明を聞き、歌われた日の出の情景を豊かにイメージ化する。	○子どもたちにわかりやすいように、またイメージが豊かに湧くように工夫して、「とよむ」「大主」「あけもどろ」「咲いわり」「きよら」の意味や語源について説明する。	*教員自身が、十分に一つひとつの表現を味わい、イメージ豊かに説明できるようにする。 ☆一つひとつのことばの意味や味わいを理解できたか。
	①（「とよむ」の説明の後）日の出のときに響いて聞こえてくるとしたらどんな音楽や音だろうか。あるいは感じる響きの様子について、具体的に表現し、交流し合う。	○一人ひとりの意見を受けとめ、共有させる。	☆豊かにイメージ化し、表現できているか。他の人の発表を聞いて、自分のイメージをさらに豊かにできているか。

	学習活動	教師の支援	☆評価の観点 *留意事項
展 開	<p>(バッハの曲みたい、ぐらぐら、ドドド～ン、きらきら、ふつふつ、ピアノのきれいなメロディなど)</p> <p>②「天」はどこ？「大主」とは何を指しているかな？などについて、イメージを広げていく。</p> <p>③「あけもどろの花の／咲いわり」について、一人ひとり静かにイメージを浮かべてみる。その上で、教室に貼ってある作品や写真の中で「あけもどろの花の／咲いわり」にぴったりのものはどれか、理由をあげて交流し合う。</p> <p>④「あれよ みれよ」について、どこで誰にどんなふうに呼びかけているか、想像してみる。(船の上でいっしょに船にのっている人に指をさして、砂浜で家族に両手を広げて、一人で、あまりの感動に誰ということなく呼びかけているなど)</p>		<p>☆生命すべてを照らした太陽の存在について、歌の表現を通して感じさせる。</p> <p>*発表させなくてもよい。目をつむり、イメージを浮かべる時間をつくる。</p> <p>*交流にあまり時間をかけすぎない。</p> <p>☆その作品が「あけもどろの花の／咲いわり」という表現にぴったりだと思ふ理由をあげて、発表できているか。</p> <p>☆「あれよ みれよ」について、想像できているか。</p>

	学習活動	教師の支援	☆評価の観点 *留意事項
まとめと次回の予告	(5)最後に、もう一度、「あけもどろの花」をみなで読む（音読）。	○つぎの時間、「あけもどろの花」の歌を群読してもらうことを予告。どんなふうによめば、生き生きと歌の世界を表現できるか、考えてくるように伝える。	☆最初の読みに比べて、イメージ豊かな読みになっているか。

（この間に、あらかじめグループ分けをしておき、群読のイメージを豊かに持つよう、働きかけ、話し合いに備えさせる。準備するものがあれば、持ってくるよう伝えておく。）

第2時

	学習活動	教師の支援	☆評価の観点 *留意事項
導入	(1)『『おもろさうし』』について、基本的な知識を得る。	○「あけもどろの花」が『おもろさうし』という歌謡集に収められていることを説明する。 →「おもろさうし」と板書し、「おもろ」と「さうし」の横にそれぞれ、「思い」「本」と書く。「おもろ」とは「思い（ウム	☆沖縄古典文学の原典といわれる『おもろさうし』について知ることができたか。

	学習活動	教師の支援	☆評価の観点 *留意事項
導 入		イ)」…沖縄に生きる人びとの思いが草紙 ^{そうし} =冊子(文集のようなもの)にまとめられたものであることを説明する。	
展 開	(2)6人ずつくらいのグループに分かれ、どんなふう に群読するか話し合い、 練習する。ワークシート に、全体と自分の役割を 書き込んでいく。 (3)群読を発表する。 他のグループの群読を味 わい、良いところ、工夫 しているところを交流し 合う。	○群読について、確認する。全員で読むところ、男子女子で分担して読むところ、一人で読むところ、強弱をつけるところ、身振り手振りをつけるところ、バックグラウンドミュージックを流すところなど。どんな工夫をしてもよい。	*補助教員が、各グループ一人ずつ入り、話し合いを支援する。 *練習する場所を確保する。 *子どもたちの日の出の作品で良いものがあれば、そのグループは、それを群読してよい。 ☆「あけもどろの花」の世界にひたり、楽しんで話し合いに参加し、のびのびと群読できたか。
ま と め と 宿 題	(4)もう一度聞いてみたい グループの群読をみなで 一つ決め、もう一度発表 してもらおう。(全員で再現 可能であれば、さらに全 員で群読する。)		☆発表グループの群読の良さを味わうことができたか。

	学習活動	教師の支援	☆評価の観点 *留意事項
まとめと宿題	(5)今日の授業、「あけもどろの花」についてや群読について感想を書く。(自分のグループ、他のグループ) (5) (宿題)「あけもどろの花」を自分のことばで訳す。	○宿題として、「あけもどろの花」の自分訳をつくるよう、伝える。	☆「あけもどろの花」や群読の体験、鑑賞について、自分のことばで感想を書けたか。

★学習指導要領との対応—主なもの★

〔第5学年及び第6学年〕

2 内容

A 話すこと・聞くこと

(1) エ話し手の話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめること。

オ互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと。

B 書くこと

(1) オ表現の効果などについて確かめたり工夫したりすること。

カ書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと。

(2) ア経験したこと、想像したことなどを基に、詩や短歌、俳句をつくったり、物語や随筆などを書いたりすること。

[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]

ア (7) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。

イ (1) 時間の経緯による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くこと。

(I) 語句の構成、変化などについて理解を深め、また、語句の由来などに関心をもつこと。

(カ) 語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと。

(ケ) 比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと。

授業の実際

各目標に照らし、授業の実際がどうであったかを述べる。授業は、2007年9月、伊波小学校6年3組担任の成底真知子教諭が事前学習から群読までを担当し、重要な古語の解説に関しては古典文学を専門とする萩野がゲストティーチャーとして行った。

(1) については、夏休みに日の出を見て感じたことを写真や絵とともにことばで表現してくることを宿題とした。写真撮影に燃えるお父さんも現れ、父母をも巻きこんだ宿題となった。以下、子どもたちの作品から。

「夏の朝／東を見れば金の花」(色鉛筆画とともに)

「その雲／そのけそのけ／朝日が出るぞ」(写真とともに)

「まっかな陽／元気をもらい／がんばるぞ」(写真とともに)

「波の音でふと目がさめた。

水平線の向こうからどでかい太陽が昇って来た。

今日は魚がつれるように。」(水彩画とともに)

「雲の上から見える朝日／いつもふつうに見ている太陽、

でも、朝日はなんでこんな特別な感じなんだろうか。

その日は、いつもよりちょっと楽しかった。

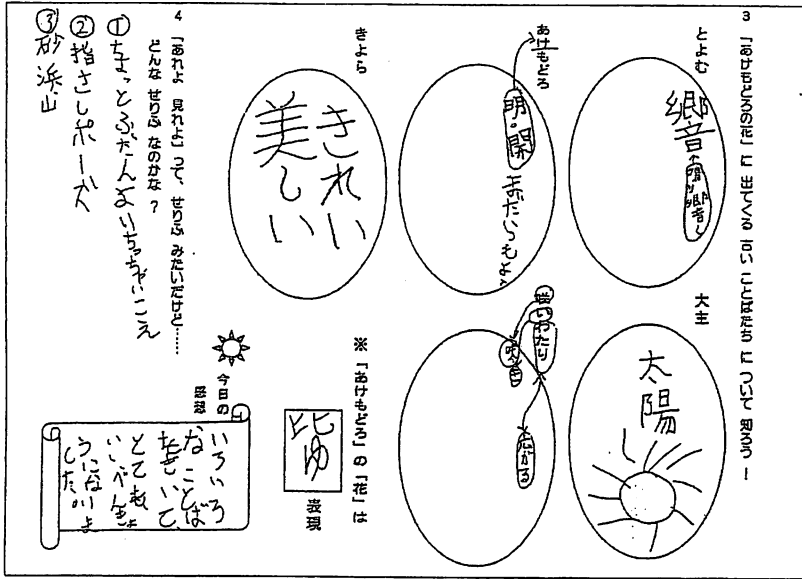
日の出、それは、僕の一日が始まる時

新しい僕になる時なのである。」(鉛筆画とともに)

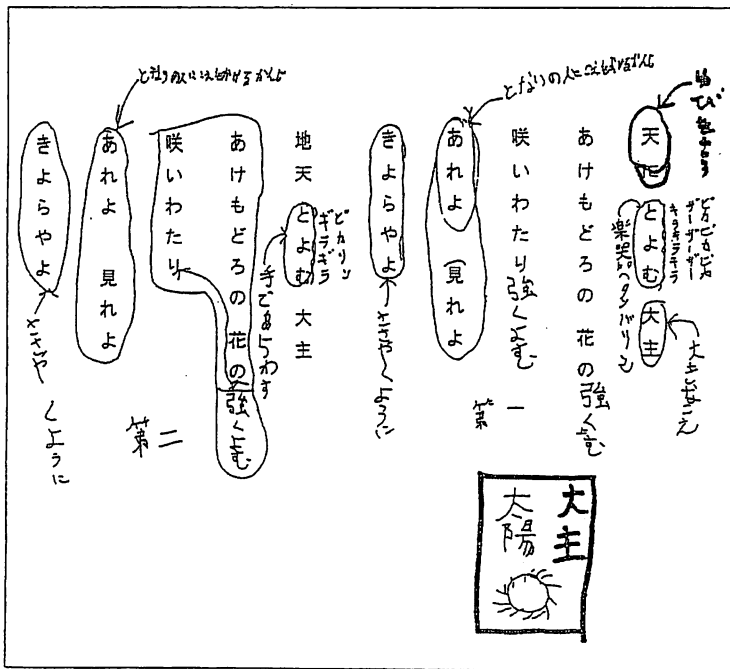
「さあおきて／日の出はみんなのお母さん」(色鉛筆画とともに)

俳句のリズムに則った作品、「金の花」や「お母さん」という比喻を用いた作品、「そこ」という繰り返しのリズムを活かした作品、沖縄の太陽の力強さや安らぎを表現した作品など多彩な作品が生まれた。これらの作品は、教室に展示し、鑑賞しあった。

(2) については、「とよむ」をはじめ古語の意味や由来について古典文学担当の萩野が説明した。ちょうど授業が「しまくとぅばの日(9月18日)」の頃に行われたため、「きよら」については、NHKの番組で有名となった「ちゅらさん」ということばから「清ら」という共通語との関わりについても説明した。子どもたちが書き込んだワークシート(萩野作成)を紹介する。



この説明をもとに、子どもたちが次の時間にイメージ化していく。たとえば「とよむ」については、自ら見た日の出を思い起こしながら「シンバルみたいなひくいドワーン」「ドドーン」「高いキラキラキラ～」「低いズ～ン」「トットットツ」「シャーン」「シャキーン」「ピカピカ」「サンサン」など音や様子を表す多彩な表現が出され、各々の感じた響きを交流しあった。(3)の群読発表については、残念ながら紙面で伝えることができない。群読のためのワークシートの書き込みの例をあげる。



「とよむ」については太鼓の音とともに低く太く響くように読むグループ、声を皆で合わせ響きわたるように読むグループ、「大主」についてはシンバルの響きとともに大きく力強く読むグループ、「あけもどろの花の／咲きわたり」については、動作を伴い、やさしくゆっくり読むグループ、あるいは高く美しく読むよう工夫したグループ、「あれよみれよ」については、大きく感動を海に向かい呼びかけるように読むグループ、隣の友だちに語りかけるように読むグループ、おしまいの「きよらやよ」については感動の余韻を表すために最初は大きく読み、次第に小さく、最後はささやくようにリフレインで読むグループ、男声と女声を交互に組み合わせて読むグループなど、一つひとつのグループが独創的に「あけもどろの花」の世界を表現した。

今回は「あけもどろの花」の世界に親しみ表現することに重きを置いたため、子どもたちは沖縄の伝統楽器サンバなども効果的に用い、「ことば」とその背景にある音楽文化とセットで楽しんでいた。一方で音声言語指導としては、〈声〉そのものの組み合わせによる表現の豊かさをさらに追究し、イメージと〈声〉の結びつきを意識化した表現力を育むことが課題としてあげられよう。

子どもたちの発表のあと、知念春美校長が授業の感想とともに「しまくとうば」による「あけもどろの花」の朗読をしてくださった。

ていんに　とうゆむ　うふぬし
あきむどるぬ　はなぬ　さいわたり…

そのやわらかでゆったりとした響きに、壮大で美しいあけもどろの花のイメージが教室中に一気に広がった。

その響きに思わず誘われ、ちょうど参観していたベトナム人の民間伝承文学研究者ゲンハンフォン先生（女性）が、即興で今度はベトナムの伝統的な歌謡を朗々と披露してくださいました。各々のことば（韻文）の美しい響きを味わい、朗読する人のことばへの深い愛情と尊厳を感じさせる教室となった。子どもたちの群読発表、校長先生のしまくとうばによる朗読、フォン先生の朗読に対する全員の大きな拍手に包まれて授業は終わった。

さいごに、宿題として出された子どもたちによる「あけもどろの花」の自分語訳（部分）をあげる。

◇共通語で訳した作品◇

地上や大地にまで鳴り響く太陽
今にも咲こうとしているまだらもようの花が
全部に咲き広がり
ほら 見てごらん
きれいに輝いているよ

◇しまくとぅばの味わいを活かした作品*三線を習っている児童◇

^{ていん}天に鳴り響くていーだ
明るいまだらもようの花が咲き広がり
あまよ 見てごらん ^{ちゅ}美らやよ

注 ていーだ：沖縄のことばで太陽 あま：あれ

◇地域の生活語の味わいを活かした作品◇

空に鳴りひびく まぶしい太陽
あけもどろの花が
咲き広がっている
あま 見て
きれいやっさー

◇これまで書くことをしようとしなかった児童の作品◇

大空に浮かぶ、太陽
あけがたの花が咲きほこる
それを みてごらん
きれいだったよ

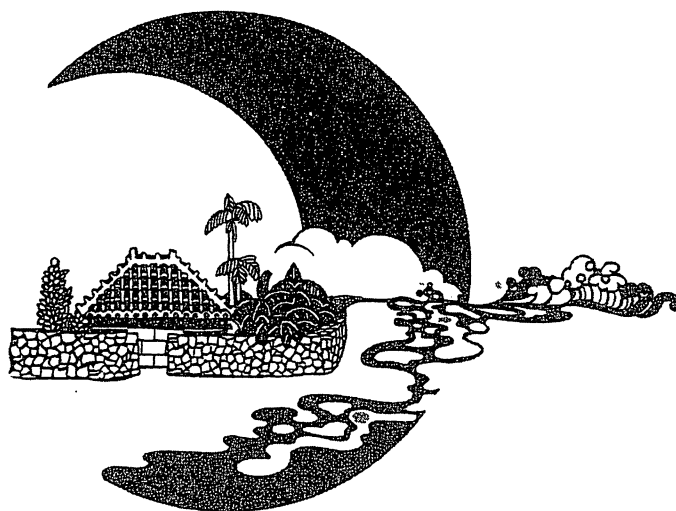
○おわりに

歌謡「あけもどろの花」は、沖縄の素朴な太陽信仰に発するものであるが、首里王府の王権とも結びあっていた。首里王府の支配下に置かれた八重山地域の歌謡には「月ぬかいしゃ」をはじめ「月」が多く登場する。本書には「月ぬかいしゃ」を教材とした単元「ことばの道～八重山のことば博士になって、『ことばの道』を想像しよう～」も収録している。併せて参照し、古の琉球孤の人びとの「太陽」と「月」に対するそれぞれへの思いや願いを感じ取っていただければ幸いである。

(文責：村上 呂里)

(注)

- (1) 白石寿文『育つことば 育てることば』東洋館出版社、1996年。
- (2) 外間守善『おもろさうし』岩波書店、1985年。
- (3) 益田勝美『火山列島の思想』ちくま書房、1968年。『益田勝美の仕事2 火山列島の思想』ちくま文庫、2006年所収。西郷信綱「オモロの世界」、外間守善・西郷信綱校注『おもろさうし』岩波書店、1972年。



授業研究会の記録

～沖縄古典文学・オモロ歌謡の群読の授業をめぐる～

- | | |
|-------|--|
| (日時) | 2007年 9月 23日 |
| (場所) | 琉球大学教育学部会議室 |
| (参加者) | Ta Van Thong (ベトナム国立言語学院少数民族室室長)
Nguyen Hang Phuong
(タイグエン師範大学少数民族口承文芸研究)
Cao Thuy Ai Bich (タイグエン師範大学ベトナム語教授法研究)
梶村 光郎 (琉球大学教員)
村上 呂里 (同上)
中村 真理子 (琉球大学学生)
城間 秀之 (琉球大学院生) |
| (通訳) | 那須 泉 |
| (記録) | 中村 真理子
城間 秀之 |

村上 第1回、多言語地域における言語教育カリキュラム開発研究、日越地域共同授業研究の研究会を始めたいと思います。この研究は文部科学省から4年間の研究費をもらっておこなう多言語地域における言語カリキュラム対策の研究です。今回初めて来ていただきましたけれども、これからも継続的に一緒に研究を続けていきたいと思っています。

4年間の研究計画をお話しする前に、昨日の伊波小学校での授業について研究会をしたいと思っています。授業の流れを簡単にご説明します。まず始めに、日の出の写真撮るか、絵を描くかをおこない、それにくわえて日の出について詩で表現する宿題を出しました。少し児童の作品を説明します。俳句で表現している児童もいます。「日の出だよ 見るほどいいよ 夏の朝」。この作品は絵があります。「日の出は私たちより早起きだ」。それから、これも俳句です。「そこの雲 そこのけそこのけ 朝日がとおる」、「さあ起きて 日の出は みんなのお母さん」、「朝日にて 心安らぐ 時間だよ」、「夏の朝 東を見れば 木に赤さ」。宿題をした上で、「昔の人が太陽をどのように表現していたか調べてみましょう」という流れで授業を進めました。昨日の授業は、日本の国語教育でよく行われている「群読」という方法を用いました。

次に皆さんの率直なご感想をお尋ねしたいと思っています。1つ付け加えますが、昨日は、群読の発表をするための話し合いの過程そのものを皆さんにお見せして、話し合いをもとに色々と試してみるという場面を見ていただきました。

Thong まず、私が考えたのは、沖縄の文化の1つであるあのような作品を取り上げることによって、若い子どもたちの心の中にその文化が根付く一端となるべくことは間違いないという意味で非常に良い授業だったと思います。また、先生が一方向的に説明するのではなく、学びつつも遊び感覚の要素を取り入れて小学生向きの時間を作ったという点が良かったと思います。

また、取り上げた『おもろそうし』の中でも、太陽という非常に具体的な目に見えるものをテーマにしたことによって、児童も関心をもつことができたようでした。さらに、先ほど呂里先生が説明してくださったように、昔の人が太陽をどのように考えていたか、ということで歴史的な距離を感じた授業となっていた点も良かったです。

一番驚いたことは、児童が、非常に自ら主体的になって授業に参加していることでした。また、グループ分けをした後、一人一人の児童がオリジナリティあふれた創作意欲を持って何かを表現しようとしていたことが印象的でした。さらに今呂里先生が説明してくださったように、写真ではなく、絵を描いた児童までいたことは自ら主体的に表現したいということの一端であると思います。このような児童の姿勢があるからこそ、グループになったときの話し合いが成り立つのだと思います。このような光景はベトナムでは全く見ることはできません。ベトナムの小学校では、先生が言ったことを児童はただ黙って聴く、黙って先生の言うことに従うというのが常道なので、児童のほうから主体的になって何かをするということには有り得ません。このような意味で、昨日は私にとって有意義な1時間でした。

そして、これは単に勉強ではなく、遊び心を非常に大切にしながら大切な沖縄文化を子供たちの頭に身につけさせることができるという教育スキルとして素晴らしいものだと感じました。例えば、真知子先生はコンテスト形式で各グループを発表させ、競争をさせました。そして、「どのグループがいいですか」ということで手を上げさせ、6番目のグループが良いということになりました。1つのゲーム感覚・遊び感覚をうまく使いながら、授業を進めていったことも新鮮でした。

もう1つ感じたことは、楽器を使うときのあの楽器の中には沖縄の伝統的な楽器は含まれていたのではないかと思います。もしそうであれば、『おもろ』という古典を言葉で勉強すると同時に、沖縄の伝統的な音楽楽器にも触れて、コラボレーションした形で授業を進めていたのであれば、これもまた沖縄の文化の吸収という意味では意味があったと思います。

それから、やはりなんといっても驚いたことは、教室の中で子どもたちに笑いがあり、非常にリラックスしていることでした。子どもたちは、遊んでいるわけではないけれど、楽しみながら教室で60分を過ごしていました。このような時間の過ごし方をしていることに非常に驚きました。

最後に僭越ながら、もう少しこのようにした方がいいのではないか、という点について3つほど述べたいと思います。1つは楽器についてです。せっかく楽器を用意したのですから、ただ太鼓を叩いたり、音を鳴らすのではなく、楽器を使いながら詩を吟じるという目的があったならば、リズムを付けたり、メロディを付けるなど、もっと楽器を楽器として使いこなすべきだと思います。ただ叩いたり、音を鳴

らすだけでは非常にもったいないと感じました。2 つ目は、真知子先生は、『おもしろそうし』を日本語の発音で説明し、読みました。児童もその発音を真似て読みました。しかし、最後に校長先生は同じ『おもしろそうし』を、日本語ではない沖縄語の発音で読みました。これは明らかに違う響きでした。この違う響きが違う響きだからこそ、校長先生は気持ちのこもった読みができたのだと思います。私は少数民族の言語の専門家として、タイ族やモン族の所に出向いて、同じようにタイ族やモン族の歌や詩を聞いています。そのタイ族やモン族も当然のことながら、ベトナム語で詩を読むことができます。しかし、モン族がベトナム語で読むときとモン語で読むときとは、やはり全く心のこもり方が違います。できるのであれば、児童も沖縄語の響きで『おもしろそうし』を読むようにした方が良いと思います。最後に 3 つ目ですが、グループごとに前に出ても、児童はかなり受身的であり、やらされているという風潮が拭えませんでした。例えば、ある男の子が「あれよ みれよ」と言うときに、本当に「あれを見てよ」、「これを見てよ」という気持ちが伝わってきませんでした。そのような気持ちを込めたパフォーマンスをすれば、もっと生き生きとした形になるのではないのでしょうか。以上です。

村上 少しだけ補足説明いたしますが、若い世代にとっては、沖縄の言葉はもうほとんど使いこなせない状態です。そういう子どもたちの状態なので、まずは共通日本語で取り組み、次に、耳で校長先生の歌を聞いて、耳でウチナーグチの響きに親しんでもらおうという段階として提供しました。

Bich まず、Thong さんがおっしゃった感想は、私も同じ感想を持っています。私は小学校教員養成課程の担当者として、いくつか違う意見を述べさせていただきます。私のコースでも、小学校教員養成課程ということでいろいろな指導法を教えております。私としては、昨日の授業の中でいくつかの新しい指導方法を見ることができたので、大きな利益を得ることができました。その中でも、子どもたちが自ら主体的に何かをしようする力を引き出す先生の導き方は素晴らしかったと思います。先生が導こうとすればするほど、児童側が緊張したり、黙ってしまいます。しかし、昨日はそうではありませんでした。真知子先生が指導すればするほど、子どもたちの動きは活発になりました。児童というのは、非常に潜在的にたくさん能力や才

能を持っています。しかし、ベトナムではそれを引き出すスキルや指導方法、能力が先生側に非常に足りないのが現状です。ベトナムの子どもたちは、おそらく伊波小学校の子どもたちと同じように豊かで優れた才能を持っています。ベトナムの小学校の教員には、それらを引き出すスキルがまだ足りないと痛感しました。

具体的な例をあげます。昨日の真知子先生の授業においては、非常に細かい準備をされたということがよくわかりました。例えば、先ほど呂里先生が説明したように、真知子先生はあの授業をおこなう前に、「このように写真を撮ってください」、「写真を見て何か感じたことを口にしてみなさい」、「絵でもいいですよ」と声をかけ、皆で読めるように大きく模造紙で『おもろそうし』を書いていた。あのような細かい作業の積み重ねがあるからこそ、子どもたちが自分でやってみようという気持ちになるのです。残念ながらベトナムでは、あのような下準備や段取りをする先生は全くいません。ベトナムの先生があのような授業をする場合、おそらく、教室に入って教壇の上であの詩をまず読んで、「はい、これを一緒に読んでごらん」で終わってしまいます。この方法は、私としては新しく、非常に有意義でした。

Phuang 私もおふた方のおっしゃったことには、同意見であることは間違いありません。私は、ベトナムの民間伝承文学の専門家の立場からいくつか言わせていただきます。『おもろ』のような歌謡とは違う詩を教えるためには、日本のような教え方は、最適かつ最も効果的な方法だと思います。実は我が国でも近年になってから、各民族の民間伝承文学をしっかりと保存し、それを次世代に伝え、そしてそれをさらに発展していかなければいけないのではないかと、という機運が高まってきております。昨日の授業を見せていただいた時に、これは伊波小学校だけで作り上げたものではなく、琉球大学の先生方や、またはこのような沖縄の文化を残そうではないかという関係者の方々が知恵を出しあってあのような授業や指導案ができたのではないかと考えました。昨日の子どもたちは、あの 1 時間で『おもろそうし』の詩の意味が完全にわかったとは思っていません。しかし、それで良いと思います。初めは、細かいことは気にせず、肩肘張らずに触れることが大切だと思います。触れることによって、『おもろ』に対して興味がわいてきたり、数年後同じ「あけもどろの花」の歌を聞いたときに思い出すことができれば、それで大成功だと思います。もう 1 つの理由は、常に児童の創作意欲というものを最

優先にしていたからだと思います。それは先ほど Bich さんがおっしゃったように、真知子先生の綿密なる用意周到な段取りがあったことも 1 つですが、もう 1 つは、この宿題で「太陽の日の出ってどんなふうに見えるのかな、それをまず視覚的に捉えてごらん」ということで、写真を撮ったり、絵を描かせたり、さらにそれから「あなたたちは日の出をどう思いますか」、ということで俳句や詩で書かせる、といったプロセスを経ているからこそ、日の出に対して何かを表現したいという気持ちが子どもたちのほうにわいてきたのだと思います。先生が一方的に指導するよりも、プロセスを経てさえいれば、児童というのは自ら主体的に何かをするようになると痛感しました。

1 つ質問したいことがあります。沖縄の民間伝承文学の『おもろそうし』を用いましたが、沖縄における民間伝承文学は完全に収集することができたのでしょうか？完全に収集してこのように全部集約されているのでしょうか？なぜそのようなことを聞くのかというと、我が国においては、どんなに時間を費やして収集しても、未だ、ある村に行くと、聴いたことや出会ったことがないような歌謡があり、古老に会って直接歌を聞くケースがあります。沖縄でもそのような状況なののでしょうか？つまり、沖縄でも、きょう現在、例えばどこかの村に行ってお爺さんに会うと、今まで聴いたことのないような民間伝承文学が存在するのでしょうか？

村上　　沖縄には「沖縄学」という学問領域があります。日本全体のなかで沖縄文化が非常に軽視され、低いものだと見なされてきた時代のなかで、沖縄学の父といわれた伊波普猷という方が 1900 年代くらいから沖縄の言葉というものの研究を書いていました。そのお弟子さんたちが、特に『おもろ』の研究者では外間守善という方とこのグループが、精力的に宮古・八重山・沖縄方言の民間伝承文学を収集して、本を三巻出版されました。それは大きな成果だと思います。また、民話の類についても、収集して文字化するという作業は進んでいると思いますが、完全というわけではないと思います。ただ非常に、伊波普猷、外間守善、そのお弟子さんたちは皆沖縄の人たちですが、非常な熱意と愛情を持ってそれを収集しました。

村上 3人の方のそれぞれの専門性に根ざした、貴重な意見をうかがうことができました。貴重な授業研究会を持つことができ大変ありがとうございました。

Phuang もう一言付け加えさせていただくと、この民間伝承というものは、文学という枠には収まらないものが含まれていると思います。例えば、ベトナムには各少数民族の口承文学があります。私は、民間伝承文学とは、民族の哲学や民族が持っている真理、宗教観や民俗学的な価値観、またはその民族の規範などを包摂しているものだと思います。近年、民間伝承文学に関心を持つ学生が少なくなっています。そのため、私の大学では、民間伝承文学を単に文学ということだけを切り取って、継承、発展させるのではなく、このようなものを包摂したその民族の大切な財産なのだという認識の下で今後も収集していく必要があるということを、強く主張しています。民間伝承文学が消滅してしまうと、単にその文学が消滅するのではなく、その民族の哲学、真理、宗教及び生活規範もなくなってしまいます。これは絶対に目に見える形で残していかなければなりません。目に見える形というのは何も本だけには限りません。ビデオや写真など、様々な手段を通じて、とにかく残していくことが急務なのだということを私どもは強く主張し、また、教員を養成する際にもその点を力説しているのが現状です。

村上 はい。よくわかりました。感想のなかで先生がおっしゃった、生徒が主体的に活動するという点について少し補足説明をします。日本でも、長い間先生が一方的に話して、子供たちは黒板を一生懸命写すという一斉授業スタイルが主流でした。1998年に学習指導要領が改訂されて、新しい学力観というのが提示されました。それまでの受身的な学習から、学習者が主体となって活動し、学ぶという方向性に学力観が変更されました。それに伴って教科国語科では、音声言語指導に力点が置かれるようになります。それまでは、読む・書く中心だったものが音声言語指導に視点が置かれるようになりました。話し合いの活動や朗読する活動が非常に重視されるようになりました。

昨日、真知子先生はグループ分けに非常に配慮してセットアップしたと思います。つまり、それぞれのグループに司会ができる、話し合いをリードできる子供を置いてグループわけをしたと考えられます。それから、Phuang先生は文学という狭い

範囲でなしに、そこに込められた宗教観、世界観をも一緒になって全体として捉えるということの大切さを指摘されました。昨日の「あけもどろの花」は沖縄に根ざした太陽信仰を表現した歌ですので、私たちは学習材として取り上げました。

現代人の私たち、特に日本人は、自然の神秘、不思議さというものを無視して生活することに慣れていきます。昨日の授業だけでは実現できなかったかもしれませんが、その背後にある願いとしては、古の人が持っていた自然への神秘に対する深い思いというものを経て、将来的には教えていきたいと思います。

伊波普猷からずっと積み重なってきた研究を基にして、子供たちにいかに伝えていくかが、私たち教員養成課程の教員の仕事です。

Thong 沖縄の方々には古において太陽信仰を持っていたと話していただきましたが、現代ベトナム人においてすら、日の出というものは非常に神々しいものであるという意味を持っています。その辺りは共有しあえるのではないかということを感じました。

Bich さきほどグループ分けのことで解説していただきましたが、それに対してもう少し言わせていただきます。実は私たちの国においても6年前に教育の大きな改革がありました。それ以前は、先生が言ったことや書いたことを生徒が受動的に覚えたり、書いたりすることが教育の方法でした。しかし、6年前の教育改革により、「積極方法」という方針が打ち出されました。「積極方法」とは、生徒が中心で、先生はその中心をコーディネートする率先者なのだという教育方針に大改革されました。しかしまだ、6年と非常に日が浅いのでこの方法はスムーズにいきません。私の専門はベトナム語教育です。ベトナム語教育のなかでこれを取り入れつつ、なおかつ昨日のようなグループ学習をし、子供たちの主体性・創造性を出せるようなベトナム語教育ができればいいと考えました。

村上 ベトナムの教科書…（教科書を開いて）…これはグループ学習ですか？

Bich これは載っていますが、全然スムーズではありません。その最大の理由は、先生の下準備があまりにもお粗末だからです。そのため、「はい、グループになってやりなさい」と言っても全然スムーズではありません。

村上 6年前とおっしゃいましたが、正式な公文書の名前とか年度を教えてください。

Bich 6年前の教育大改革の名前は、「全教科書再編」という名称の改革です。これに対する公文書は当然あります。

村上 2001年ですか？

Bich そうです。2001年です。

村上 今日は貴重なご意見を頂きました。今後4年の間に、また沖縄で授業を作ってそれを見学していただき、今日のような授業研究を行います。そして、今度は私たちがベトナムへ行って、ベトナムの小学校の地域言語教育に関わる授業を見て、授業研究を行います。相互交流を通して、教育方法について相互に高め合うとともに、地域語を学ぶとともに共通語を学ぶというようなバイリンガル教育の教育カリキュラムを開発してもらおうということを考えています。

Bich タイグエン師範大学というのは、ベトナム国土の多くの山岳少数民族が住んでいる地域に対する教育を担っている中核大学です。しかし、実際私のもとで養成した小学校教員が、山岳少数民族地域に行ってベトナム語を教えて効果的な成果が上がっているかというところは実はあられていません。やはり効果的なカリキュラムを作らなければならないという問題に直面しているところです。まさにおっしゃる通り、協力してより良いカリキュラムを作るということは大いに賛成であります。

Bich 例えば、我々の学校から卒業した教員が少数民族地域にいても、全く効果が上がらず、子どもがどんどん低学年から中学年、中学年から高学年へと上がっていています。少ししか話せないのだけれども、学校で教えてもらった指導書には非常に難しい言葉が書かれています。その狭間に立って「先生何言ったの？何やったの？全然わからない」という子もいます。

Thong 私も賛同します。このような言語教育の問題を克服するためには、やはりいくつかの指導書を作らなければならないでしょう。指導書にも色々あります。教科書や練習帳、副読本などいくつかの本や書籍をこの4年間で、もし作ることができたなら非常に効果があると思います。

今回沖縄へ来て、ベトナム側と沖縄側で基幹的問題のそれぞれ違う点がよくわかりました。ベトナム側の内側少数民族地域で問題となっているのは、先ほど Bich 先生がおっしゃったように、少数民族の児童がなかなかベトナム語を覚えられないこともその通りですが、もう1つは、民族語がわかっていないことです。例えばタイ族がしっかりとタイ語がわかっているかという、わかっていません。わかっているという意味は話せるというだけです。家のなかで家族と話せるというだけであって、タイ語で書かれた本を読むことや書くことは全然できていない、というような問題がベトナム側にあります。沖縄に来て今回わかったことは、沖縄語というものはあるけれども、それが若い世代に対して継承されていない言葉であるということです。

もう1つ言わせていただきますと、ベトナム側と日本側で共有できる問題もあるということです。それは何かというと、国家語と地方語との関係です。これはベトナムでも、今回来た沖縄でも問題になっているからこそ昨日のような授業がとられるわけです。地方語を教育するにあたって、2つの方法が現存しています。1つはバイリンガル教育。つまり地方語を教えつつ、普通語を教えるということです。もう1つは単一言語教育。この2つがありますが、いったいどちらを採った方が良いのか、どちらが少数民族にとって良いのかということをよくよく検討していかなければいけません。この問題については両国が共有できる問題です。

ベトナムでは国家語と地方語の問題やバイリンガル教育、単一言語教育について、それなりの経験を持ちます。しかしその大半が失敗した経験です。その失敗した経験を皆様に伝えることによって、皆様方の参考にもなると思います。また、我々と皆様方の考えをフィードバックしていくことで、ベトナム側にとってのメリットになるのではないかと思います。

Phuang 沖縄に来て昨日の授業しか見ていませんが、やはり沖縄語の継承ということ

についてはかなり深刻だと思いました。それを踏まえて申し上げますと、タイグエン師範大学では、キン族に少数民族語を教えます。キン族の学生は、卒業したら少数民族地域に行って先生をしなければいけません。その時その子どもたちはベトナム語がわからないので、まず少数民族語で児童とコミュニケーションをとらなければいけません。キン族出身の先生は、少数民族後を把握していなければいけないのです。そのため、タイグエン師範大学では、そのようなカリキュラムがしっかりと組まれています。さらに、例えば、タイ語を話している部落に行っても、全員の児童がタイ語を話せない場合もあります。最近ではテレビやラジオで簡単にベトナム語が聞くことや楽しい番組を見ることができます。子どもたちはベトナム語が解らなくても、小さい頃からベトナム語の面白いテレビを見たり、ベトナム音楽を聴いて、タイ語の正しい発音を習得できないまま学校に入ってきてしまう子どもたちもいます。そのような場合、ベトナム人の先生が、タイ語の正しい発音を教えなければなりません。そのような地域さえあるのです。このような経験やスキルが、沖縄の教育現場で沖縄語を継承するために何らかの参考になればご紹介したいと思います。

最後にもう一言だけ言わせていただきます。昨日は『おもろそうし』の中の「天にとよむ」という一節を取り上げました。呂里先生の方から「あけもどろの花」は太陽信仰を表したものであるという説明がありました。ということならば、おそらく『おもろそうし』の中に太陽を讃える他の唄もあるのではないのでしょうか。もしそうであるならば、伊波小学校で沖縄古典を学ばせるときに、「天にとよむうた」だけを教えるのではなく、『おもろ』の中に他にも太陽のことをうたっている唄があると少し視点を変えて紹介することによって、太陽というものが非常に昔の沖縄の人にとって大切なものなのだというような宗教なり、哲学なりが育まれるのではないのでしょうか。